

漫画と文芸のコラボ

～読み応え十分の諸作を紹介

図書館係 阿部健治

7月15日に第163回芥川賞・直木賞が発表された（表の面で既報の通り）。芥川賞の方は太宰治の孫にあたる石原燃（石原は太宰の妻石原美智子の姓）がノミネートされた。太宰が芥川賞がほしいと選考委員である川端康成に懇願して拒絶されたというのは有名な話だし、太宰の次女で石原の母である津島佑子も3度候補に上りながら未受賞（津島は2016逝去。海外では日本を代表する作家とも評価されており、芥川賞は新進作家の賞なので途中からはもう対象外になってしまった……）ということで、「ついに3代目でリベンジ受賞か」などと話題になった。筆者は作品そのものよりも話題性先行の受賞になったらちょっといやだな、と思っていたが、これは杞憂であった。受賞は**高山羽根子『首里の馬』・遠野遥『破局』**の2作。石原燃『赤い砂を蹴る』も含めて図書館で購入したので、どれが本当に良いか、読んで確かめてほしい。

直木賞は7回目のノミネートとなった**馳星周（はせせいしゅう）『少年と犬』**が受賞した。初ノミネートから23年目の受賞だと言う。馳星周は当初ノワール小説（ノワールとはフランス語で「黒」「闇」のこと。犯罪に関わるような闇の世界を描いた小説の意。『不夜城』シリーズが特に有名。）の名手として名を馳せ（！）たが、その後動物（特に犬）と人間の交流を描く作品（『ソウルメイト』シリーズなど）も手がけるようになり、今回もその系列の作品だった。特に「犬」が好きな人は読んでみるといいかもしれない。6回目のノミネートで恩田陸が受賞した時（第156回・2016年下期『蜜蜂と遠雷』）も、直木賞をとるのって本当に大変だなと思ったが、今期も改めてその思いを強くした。

芥川賞・直木賞作品がよいのは分かっているけれども、表現は難しいし、ちょっと長いもあるからなあ、と二の足を踏んでいる諸君。そういう人向けに、今回はいい情報を教えよう。こういう作品を**一流の漫画家**がコミカライズする、という素晴らしい文化が日本にはある。しかもそれが足女図書館に置いてあるのだ。これを利用しない手はないのではないか。どうだろう。足女生諸君。

その一つは、**三浦しをん**（今回から直木賞の選考委員になった）の本屋大賞受賞作『舟を編む』（2012）を栃木女子高校卒の漫画家**雲田はるこ**（代表作『昭和元禄落語心中』が第38回講談社漫画賞（2014）、第21回手塚治虫文化賞（2017）を受賞、同作はNHKでテレビアニメ、及びテレビドラマ（岡田将生主演）として放映された）が、これ以上はないほどのリスペクトを込めてコミカライズした作品（I T A N・講談社）である。三浦は、この作品を雑誌に連載するときの挿絵画家として当時ほとんど無名だった雲田を指名し、雲田もこれに答えて渾身の挿絵を描いた。この挿絵は残念ながら、本になった『舟を編む』には載せられていないのだが、筆者は『雲田はるこ原画集』で見ている。色付きで非常に精細に描かれており、素人である筆者にも雲田の思い入れがひしひしと伝わってくる作品であった（この原画集は足女にはないのです。ごめんなさい。）。

こういう経緯を経てのコミカライズであるので、雲田は原作を細部に至るまで全く改変していない。本当に忠実なコミカライズで、読んでいると、三浦と雲田

の絆（師匠と敬愛を持ってそれに応える弟子のような。いわば、杉本昌隆八段と藤井聡太棋聖の交流のような＝ちょっと脱線気味でごめんなさい。でもこれが実感なのです。）がこちらの胸に迫ってくるような感じなのだ。

『舟を編む』は辞書作りに打ち込む真面目人間（馬締光也というちょっとふざけた名前だが）を主人公にしている。この作品は本屋大賞受賞作だから映画化もされていて、映画では主人公を松田龍平が、その恋人役の林香具矢（かぐや姫をイメージさせるキャラ！）を宮崎あおいが演じている。宮崎はとてめかわいくて、慣れると（映画も何回か見ているので）魅力的なのだ（流石の演技力という感じもするし）が、最初は雲田の描く香具矢の印象が圧倒的に筆者の内部に住み着いてしまっていたので（流し目がすごいのだ。是非コミックを読んで確認して！）、すごく違和感があった。

このように、雲田は人物造型が素晴らしい上に、人物の表情の描き方が絶品。今も、コミックを手元に置き、いろいろな場面を確認しながらこれを書いているのだが、わかっていてもドキドキしてしまう。それほどの力がある漫画家はそんなに多くない。これを是非味わってほしいのだ。

もうひとつのオススめが、最初にも触れた、**恩田陸の本屋大賞・直木賞ダブル受賞作『蜜蜂と遠雷』**を原作とする、漫画家**皇（すめらぎ）なつき**のコミカライズ版（幻冬社コミックス）である。恩田の原作はピアノコンクールに臨むコンテストタントの群像を描いたもので、設定そのものは『ピアノの森』（この漫画もいいですよえ）などでもおなじみのパターンであり、プロットの新奇さは全く感じられない。しかし、書く側にとっては、だからこそ難しいのだ。筆者は恩田のこの傑作を読むまでそれが全くわからなかった（恥ずかしい）。この難しさは実は「食レポ」の難しさと同じと言ってよい。彼らはすべて「美味しい」ものばかりをレポートするからだ。『蜜蜂と遠雷』のコンテストタントたちは皆天才であり、「素晴らし」くない演奏はない。ではどこがどう違うのか。その違いを言葉だけで筆者のような素人にどう伝えるか。これは本当に難しかろう。恩田はこの素材を創作初期からずっと抱えていたらしい。しかし、彼女はこの素材がどれだけ難しいかよく分かっていた。多くの経験を積み、いよいよいけそうだという感触を確かめ、満を持して取りかかったのである。

この作品が放出したエネルギーは凄まじかった。この作品は前述のように、本屋大賞・直木賞のダブル受賞作だが、実は恩田の2度目の本屋大賞受賞作でもある（最初の受賞は『夜のピクニック』（2005））。本屋大賞は書店員の投票で決まる文学賞で、当初は新人発掘の意味合いも強かったのですが、ベテラン書店員たちには『蜜蜂と遠雷』を推すのをためらった人もかなりいたらしい。それでもこの作品は圧倒的な票を集めて、2度目の本屋大賞作となったのである。

こういう作品をコミカライズするということになって、選ばれたのが「皇なつき」である。皇には京劇（中国の古典芸能）の俳優を主人公にした『燕京伶人抄』シリーズという名作があるので筆者は楽しみにしていたのだが、実物はそれを更に超えた出来映えだった。皇が描く人物たちはすべて、「ある空気」をまとっているのである。俳優を多く描いてきた皇だからこそできたことだろう。コンテストタントという「演者」を描くには最適の人選であった。

調べてみたら、皇は推理作家森博嗣の原作をコミカライズした『黒猫の三角』（2002）や宮部みゆき原作の怪談をコミカライズした『あやし 怪』（2010）を既に出版していた。実は早くから一流作家たちに認められた存在だったのである。

雲田はるこや皇なつきの作品ぐらになると、漫画とはいえ、明らかに文芸批評に耐えるレベルに達していると筆者は思う。日本の漫画文化の高さ、また、それに接することができる幸運に感謝するとともに、足女生諸君には是非こうした本物の「漫画」を味わってほしいと願うばかりである。